

北条政子の生涯

—『吾妻鏡』—より

岡崎 嘉彦

『吾妻鏡』は鎌倉後期に編纂された日記体の記録で、北条一門の繁栄を綴った鎌倉初期の史書である。この鎌倉時代は中世の幕開けの時期であり、封建社会が新しい体制として生まれたばかりの時代である。鎌倉幕府の成立は公家政治から武家政治への変革期であり、『吾妻鏡』は源頼朝の妻政子の人物像を見る上で非常に貴重な資料である。

北条政子は伊豆の豪族北条時政の長女として生まれた。父、時政が流人である源頼朝の監視役になるのだが、政子は頼朝と恋仲になってしまう。時政は平氏の怒りを買うことを恐れ、政子を伊豆の日代山木兼隆と婚姻させようとするのだが、政子は強引に頼朝のもとへ逃げてしまう。その後、政子と頼朝は伊豆山権現に匿われた。政子はまもなく大姫を出産し、やがて時政も二人の結婚を認めるようになる。そして、時政と北条一門は頼朝を支援するようになる。

1180（治承4）年、以仁王の令旨を受けて頼朝は挙兵。この時頼朝は石橋山の合戦には敗れたものの、二ヶ月後には富士川で平家軍を破り、鎌倉に凱旋して伊豆山に避難していた政子を迎え入れた。政子は1182（養和2）年に嫡男万寿（頼家）を出産する。

武家政権を樹立しようとした頼朝は、その存在基盤を確固たるものとするために非情な策を打ち出していく。平家打倒の功労者でもある源義経を追討し、その愛人静御前に対しても厳しい処置をする。そして、一門で頼朝の敵となった木曾義仲の子で、長女大姫の婚約者でもある義高を殺害し、大姫の心に深い傷を負わせた事も政子には精神的な重荷となっていく。

1192（建久3）年、頼朝は征夷大將軍に任じられ鎌倉幕府を開く。その年、政子は次男千幡（実朝）を産む。しかし、長女大姫に続き夫である頼朝が相次いでこの世を去ってしまう。その後、頼家が鎌倉幕府の頂点に立ち政治を行うが、乳母の比企一族と共に政子にたてつくようになる。頼家の専横を見かねた政子は頼家を幽閉し、次男実朝を將軍につける。実朝は朝廷との融和を図る政治を行ったので、右大臣にまでも上りつ

める。しかし、右大臣拝賀式のために鶴岡八幡宮に入った実朝は甥の公暁に暗殺されてしまう。政子達は代わりに新將軍として右大臣九条道家の四男三寅を鎌倉へ迎えた。そして、政子が幕政に関与して、実質的に將軍職を代行するようになる。源氏が三代で途絶えたことで、皇権の復活を計る後鳥羽上皇と幕府の対立は深まり、上皇は遂に挙兵する。御家人達や鎌倉は混乱したが、政子が御家人達を説得し動揺を収めた。幕府軍が大軍を擁し京へ進軍したことで、官軍は各地で敗走する。幕府は京を制圧し、後鳥羽上皇は隠岐に配流となる。政子は、その後幕府の実権を握り、北条泰時・時房をたて幕府の安定を図っていく。幕府の新体制が軌道に乗りだした1225（家禄元）年、政子はついに病に倒れ息を引き取る。鎌倉幕府と共に激動の人生を歩んだ女性の生涯であった。

『吾妻鏡』の中で、公の女性として、あるいは女性個人としての政子の姿は大きく異なる。権力闘争の中で「東女」としての意地を發揮し、わが子や孫、さらに父を排斥してまで幕府を守ろうとする「尼將軍」の姿がある。一方で、彼女の恋愛観は一途なもので、頼朝のそれとは大きな違いをみせる。一人の女性に縛られない京風の愛を求める頼朝に対して、東国育ちの政子は激しく嫉妬し、彼の浮気を責める。互いに育ってきた文化の違いから生ずる葛藤であった。政子は後に頼朝の愛人の家を壊すなど感情を、あらわにする一面もあった。夫の意志をついで非情な策を用いてまでも幕府の安定を守ろうとした政子だが、それは頼朝一人への想いがあったのこともかもしれない。

■主な参考文献、そして、今回おすすめる図書

- 『吾妻鏡』（全三巻）国書刊行会 昭和44年。
- 五味文彦著『増補 吾妻鏡の方法—事実と神話にみる中世—』吉川弘文館2000年。

おかざき よしひこ（司書・情報サービス課）